

# 人生100年 健やかに生きる

「体育・スポーツとともに」

(16)

NPO法人 ならスポーツクラブ理事長

北 良夫 (91)

8月10日付の奈良新聞記事を読んで驚いた。8年後の国民スポーツ大会(国体)が奈良県での開催が内定している。この大会の陸上競技は大阪市長居陸上競技場の施設を借りるという知事の発言が掲載された。40年ぶりの開催を心待ちしている県民の心に冷水を浴びせる発言である。

そもそも国民体育大会(国スポ)は戦後間もない1946(昭21)年、戦後の混乱からスポーツを通して立ち上がる気力をもたらしたものの思いから発足したものである。戦火の被害が少なかった京都を中心に関畿地区で第1回大会が開かれ、奈良県でも権原公苑にお

## 主役は県民、地元開催を

いて相撲・自転車競技が行われた。その後も本県開催は54(昭29)年、北海道開催が内定した9回大会、気候の関係で夏季大会返上の声に、当時奈良県水泳連盟会長で、県体育協会長であった中山正善氏(天理教2代真柱)

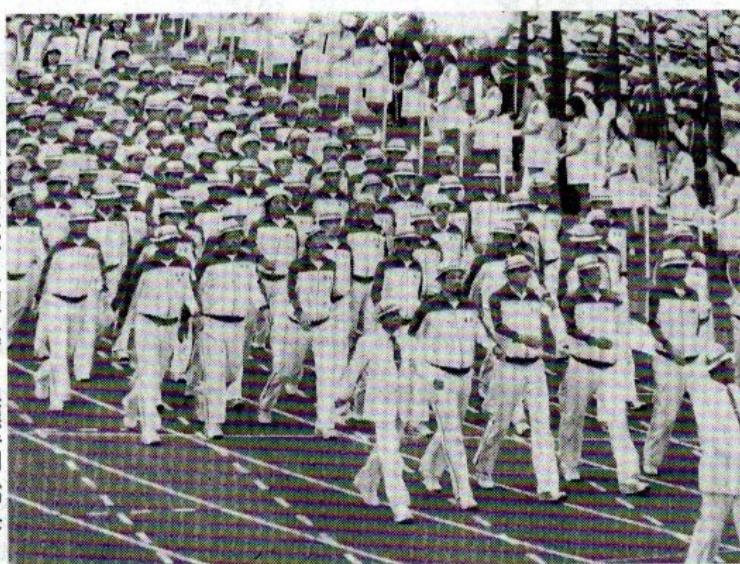
(セーリング)は、兵庫県芦屋市の会場を借りて、斑鳩町のため池を所有者の厚意で改造成して利用、地元県立斑鳩高校にクラブを設置して活躍。国体後も所有

一方、陸上競技はあらゆるスポーツの原点、記録への挑戦がす

べてである。競技場が公認であることは競技者にとって最も重要なこと、公認競技場が身近にあることも、競技を続ける上で必要なことは言うまでもない。

わかつさ国体が内定した40数年前、陸上競技場の建設について糾き難い。わかつさ国体の開催は、県内にはなかつたボクシング、レスリング、フェンシングなどは制限されてきた。

私も8年後には99歳、人生100歳の時代、健康を維持しマイペースのトレーニングに励み、本番は聖火ランナーに選ばれて走る夢を抱いている。走る会場は地元奈良がいい。



わかつさ国体開会式で入場行進する県選手団(中央手前が著者) 1984年